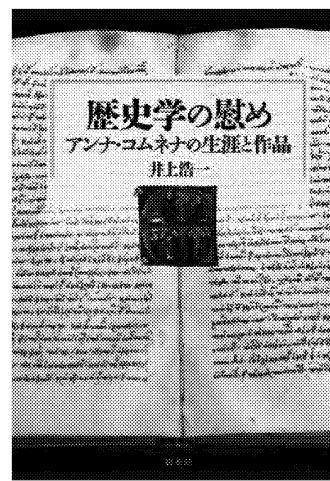


1453年にオスマン帝国に首都コンスタンティノープルを占領されるまで、千年間続いた国がある。東ローマ帝国、別名ビザンツ帝国。最盛期には中東から地中海全域を手中に収めた大帝国である。1083年、その帝室で一人の娘が生まれた。アンナと名付けられたこの娘は、長じて一冊の史書を残した。愛してやまない父アレクシオス1世の業績を世にとどめようと記した『アレクシオス』である。昨年日本語訳も刊行された。中世の西洋世界において女性が残した例外的な史書もある。ビザンツ史家井上による本書は2部にわかれ。第1部ではアンナの生涯を振り返る。帝室に生まれながら、父の死後弟との骨肉の争いに敗れ、修道院に幽閉されたアンナを多くの歴史家たちは不幸な人生と評してきた。しかし井上の見立ては違う。幽閉後に歴史学

## 歴史学の慰め

井上 浩一著



(白水社・3200円)  
いのうえ・こういち 大  
阪市立大名誉教授。著書に  
『生き残った帝国ビザンテ  
ィン』『ビザンツ皇妃列伝』  
など。

も、歴史学としての分析の水準を下げるのではない。専門家向けの難しい術語を使わなくとも、これだけの読みの深みを多くの人に届けることができるのだ。本書を通じてアンナと井上という2人の偉大な歴史家の思考を辿ることによって、私たちもまた歴史家とは何か、歴史書とはどのようにあるべきなのかを実感することだろう。

と出会い歴史に残る歴史書を書き上げた大帝国の皇女の生涯を、終わり良ければ、という立場で読み直す。史家として大仕事をなし精神的に満足も得たとする肯定的評伝である。

シアス』はそれまでの歴史叙述の作法を超えて、アンナが父を讃えんと生き生きとした描写をするために、様々な文芸ジャンルの手法を取り込んだ歴史書だとする。

客観的な事実と推論を重ねながら

沈潜する。

シアス』はそれまでの歴史叙述の  
作法を超えて、アンナが父を讃嘆した  
と出会い歴史に残る歴史書を書き  
上げた大帝国の皇女の生涯を、終  
わり良ければ、という立場で読み  
直す。史家として大仕事をなし精  
神的に満足も得たとする肯定の評  
伝である。

2部では『アレクシシアス』をさ  
まざまな角度から丁寧に読み解  
く。井上は本書を「越境する歴史  
学」と喝破する。つまり『アレク  
シアス』はそれまでの歴史叙述の  
作法を超えて、アンナが父を讃嘆した  
ために、様々な文芸ジャンルの手  
法を取り込んだ歴史書だとする。  
客観的な事実と推論を重ねながら  
ら、所々に、井上のアンナへの思  
いが吐露される。読み手の私たち  
は、共感を誘うその筆致に誘われ  
るがままに、12世紀の人と作品に

清江先生集